

1994 年度上半期

1. 新歓山行 雲取山 4/23~4/24

メンバー：古瀬（L）、淵沢（SL）、吉武、安部、大谷、西井、福元

4/23(土)晴→曇→雨 奥多摩駅→雲取山荘

新入生初の山行。七人と久しぶりの大所帯である。福元の遅刻で 50 分遅れの出発。天気・気温は快適で順調に登る。堂所付近の見晴らしがいい。檜の手入れが行きとどいている。奥多摩の割には原生林も多い。ブナ坂付近でアマが降り始めて、初山行ということもあるのだろうが、少々ペースが落ちる。雲取山の巻き道ではまだ残雪があり、吉武や大谷がこける。小屋脇のキャンプ場に着くころには雨がかなり激しくなる。安部がベジタリアンのため食事には苦心する。

4/24（日）晴 雲取山荘→雲取山→鷹の巣小屋→奥多摩駅

8 時すぎに雲取山に向かう。北斜面であるため昨日同様で残雪が多く、凍結しているところもあった。頂上でオジサンがオカリナで「シルクロード」のテーマを演奏している。夏山のための練習のようだ。（つまり下手つてこと。）円形は雲に隠れているものの、奥武蔵・奥秩父の重々しくかつ母性を感じさせる山並みが見れた。満足して下り始める。一年生は 4 人とも疲れ気味で淵沢がひたすら突っ走る。七ツ石・鷹の巣・六ツ石はいずれも巻いても奥多摩駅に下る。（文責 大谷）

2. 個人山行 海谷頸城（鉢山→昼闇山→金山→雨飾山）4/29~5/3

メンバー：古瀬（4）、淵沢（3）、吉武（2）

4/28 上野駅

「加賀」で行くはずが、手違いで「能登」に乗る羽目になる。ラッシュ並みの混雑で、異様に殺気立った社内では一睡もできない。

4/29 糸魚川→焼山温泉 8：25→昼闇谷 11：00→1000m 付近 12：30

焼山温泉は桜とふきのとうが盛り。見上げると烏帽子、阿弥陀の岩峰の茶色い地肌が朝日を浴びている。初めは除雪された車道だがすぐに雪が出てくる。終始歩きやすく、しかも前方は稜線まで広々した斜面が見渡せる。アケビ平は植林されたようなスギ林だったので視界の効く東端に行く。すると昼闇、鉢、阿弥陀、烏帽子といった個性的な山々に囲まれるようになり、東海谷の懐に入っていくのがわかる。雪解けの小さな流れを渡りながら行くと、雪の詰まった昼闇谷にでる。登り返してすぐ西の尾根に行く。前夜はほとんど寝てないためペースが落ちてきたのと、この先にテン場がなさそうだったので早めに幕営。

4/30 5:30 発→7:55 鉢山・昼闇のコル 8:15→8:55 鉢山 9:15→9:45 コル
10:00→13:00 昼闇山 13:15→高松山分岐 13:55→1750m付近 14:40

コルを目指して浅い沢を幾つか越えていく。上部はどこでも歩けるような穏やかな地形で、ところどころに幕営適地がある。コルに吉武と荷物をデポし、上級生だけで鉢山往復する。コルから見ると、げに恐ろしげだが、行ってみると何のことはない、少し急なだけのヤブ山だった。このためにザイルをもって行ったのに拍子抜けする。(今山行ではアイゼン、輪かん、ザイルは全く使わなかった。) 落ちようにもヤブに邪魔されて落ちられない。最後はヤブを避けて南側の雪面からつめると、細長い頂上に出る。同じ目の高さに海谷の鋭鋒が並び、下には白い吉尾平が広がる。Dynamic!

昼闇の1650mから雪面の急登があり、気温も高く雪崩を警戒したが、左に多少緩やかな部分を見つけそれをたどる。正面は雪庇だったので更に左から回り込もうとするが、より急で不安定な雪質のため右に回ってヤブに入る。そこからピークまでは海谷側をヤブこぎするがそれほどひどくない。昼闇山は暴れん坊の海闇全山を見下ろす兄貴分のようなもので、そうするとさしずめ焼山は煙草をくわえたはげおやじといったところか。昼闇の先は丸い尾根のアップダウンで、視界が良く問題ない。高松山分岐からは地図では入り組んでいるが、東側が切れおちているしわかりやすい。

5/1 5:15 発→富士見峠上 7:40

気温は高いが風が強く、焼山にかかっている雲がだんだん降りて来る。ガスと雨の中でもルートは明瞭で、大方雪の上を歩いて焼山直下に達する。全く平坦な台地だったが、すぐ裏金山への稜線が見つかり位置を確認できた。雨風共に強まり、ここで止まること

にして泊岩を探す、南に行き過ぎたのか見つからない。仕方なく稜線が見えるところにテントを張り、ブロックを積む。

5/2 13:10 発→裏金山 14:10→金山 15:35

雨は止んでいるが風とガスはあいかわらずで、出発を見合わせる。その間に2パーティー現れ、少し話し込んで去っていく。午後からはれるようなので、我々も金山までは行くことにしてガスの中出発する。しかし富士見峠で淵沢がルートを誤り、今後課題が残る。また吉武は雪にはまった自分の足を自力で取り出せず、10分かかってピッケルで掘り出す姿はまぬけだ。次第に晴れていき、妙高・高妻も見えてきた。平たい金山頂上のコメツガの間にテントを張る。食後にシゲクラ尾根方面を偵察し、篠竹を打っておく。

5/3 4:55 発→茂倉峰 5:40→鋸岳分岐 7:20→笹平 8:20→8:45 雨飾山 9:20→笹平 9:40→大海川 12:05→小谷温泉 13:45

心配していたガスも出ず、順調に行く。小鳥のさえずりが耳に心地よい。前線の影響で南から温かい風が吹き、TシャツでOK。ほとんど雪上を抜けるが、雪のないところには踏み跡もある。雨飾山頂に立って、これで後は下るだけとほっとしたのもつかの間、今山行忠最大の難関はこの下にあった。急な雪面の下降になれない吉武を真ん中にし、クレバスを避けて降りてゆく。雪質はそれほど悪くないので何とか行けそうだと思っていたところ、最後の第クレバスを避けようと左にトラバースした淵沢が、雪質の変化に足をとられてスリップ。すぐに止まったが、続く吉武が同じところで同じようにスリップ。しかもピッケルから手を離してしまい、駄目かと思っただけで、なんとかひざで止まり、2mほどの滑落で済んだ。クレバスの2m上だった。その下は大海川まで真つすぐ500m以上の雪渓が続いている。クレバスの下で見上げていた多数の登山者からどよめきが起こる。吉武は落ち着いており、その後は慎重にステップを作ってトラバースし、無事安全地帯についた。結局大海川に出るまで雪のン鶏舎が続き、吉武はもう一度すべり、膝を痛めている古瀬は足を引きずりながら河原にでる。ともあれ、ほっとして小谷温泉に向かう。新緑とミズバショウが目にしみた。

はんせい:まだ経験の浅い2年がいることを常に念頭に置き、もっと危険に対して敏感であるべきだった。また雪訓を一回下だけの2年の実力を課題評価していたようだ。

(文責：古瀬)

3. 個人山行 丹沢 小川谷廊下 5/14

メンバー：古瀬、淵沢、吉武、長尾、西井、福元 晴れ

入渓が大幅に遅れ、核心部を目前にエスケープしてしまう、ちょっとさびしい沢だった。懸垂やチョックストーン滝は一年生にはシビアだったようだが、最期大釜で率先して飛び込んで大はしゃぎ。それにしても長尾のケツは重かった。

4. 個人山行 逆川（沢登り） 6/5 晴れ

メンバー：古瀬、淵沢、大谷

大谷にとっては初めての沢のぼりである。いきなりの 11m の滝との対面に面食らっていたが、その画は順調に進む。相変わらず古瀬はゴルジュにおちて喜んでいる。天気はよかったが、まだ、水は冷たい。

沢を抜けると藪をこいで川苔山まで登る。頂上には一般登山者がいた。彼らにとって我々の出現は“ジャジャジャジャー”の世界だったに違いない。少し休んで鳩ノ巣に下る。（文責：大谷）

5. 雪上訓練 南アルプス大樺沢 6/16-19

メンバー：古瀬、淵沢、吉武、大谷、中居、長尾、西井、福元、引地 OB、

田形 OB

6/16 夜行で甲府駅まで行く。

6/17 曇り 9:00 広河原発、13:15~15:17 雪上訓練（大樺沢）

15:55 到着

吊り橋を渡って山道に入る。前夜の OB の差し入れで二日酔いの某一年と L を残して他のものは石と木の根の道を先に進んだ。雪訓では雪上歩行とピッケルストップの練習をする。

6/18 曇り 4:20 起床 6:30 出発 7:10~16:00 雪上訓練 16:30 帰着
大樺沢につく手前で引地OBに会う。雪上訓練では前日のメニューに加えて
ザイルワークの練習をする。田形OBも合流し、入れ替わりに引地OBと一年の一人が
下山した。

6/19 雨 7:20 出発 11:40 広河原 12:05 バス

北岳登頂は雨のため中止となり、尾根伝いに下山する。雨で滑りやすく打撲するものも
ある。休みを取らずに一気に下る。バスで駅に向かう途中土砂崩れで通行できず、バス
を降りて石を脇にかき寄せるハプニングもあったが無事駅に着いた。(文責:吉武)

6. 小坂志川 湯ノ沢 6/26

曇り メンバー:淵沢、吉武、大谷

一般の人が沢といわれて思い浮かべるような細い沢で、ナメが主であった。両
側から気が覆いかぶさり、日は木の間越しであるので、全く静かである。ガイ
ドブックにあるようにザイルの必要はなく、沢登りに来た者には物足りないも
のであった。仕方がないから、トラバースの練習をしつつ行くが、苦手な私は
30cmほどおちて手首を切る。源頭部には密林探検のようなヤブこぎがあり、
尾根に突き上げる直前のところは緩い土だった。尾根の反対側の斜面は日が良
く当たり、ワラビがあちこちに生えていた。後は1時間ほど尾根を下り、最後
に橋をわたると道路に出る。途中、巨木とともに祠があった。

7. 個人山行 東北 船形山大倉川笹木沢 7/6,7

メンバー:古瀬、山内(OB)

7/5 上野→仙台

7/6 →定義(十里木) 6:00→戸立沢出合い 6:50→笹木沢出合 8:25→大滝上
11:25→縦走路 14:00→船形山頂 16:15→升沢小屋 17:05

7/7 →旗坂→升沢→仙台

山内OBの留学前に1本大きな沢に行こうと話していたが、なにせこの時期、増水とスノーブリッジが気にかかる。それでも東北の沢に行きたいということで、割合手頃な笹木沢にする。拍子抜けするほど短かったが、とびきりの美渓だった。白く川幅いっぱいゆったり滑り落ちる滝が続き、緩やかなブナの森の中を滑るようにナメが続く。歯ごたえという点では物足りないが、静けさと奥深さと美しさに十分満足した。紅葉の時期に別の沢と継続してやるの也不错かもしれない。なお、大倉川本流左岸の道はまだ使える。我々はまず右岸の林道を堰堤まで行き、そこから左岸の道を戸立沢出合まで行って入渓した。また、大滝の手前に20m弱の崩れそうなスノーブリッジがあった。(文責：古瀬)

8. プレ夏 八海山 7/16,17

メンバー：淵沢、大谷、西井

7/16 山口 8:45→9:26 二合目→10:25 三合目→10:55 五合目→14:15 七合目
→15:40 千本檜

気温が高く、林道歩きで西井がバテる。先が長いので仕方なくスイカや共同装備を減らす。川原からいきなり鎖づたいの急登が始まり、早めはやめに休憩を取っていくので、ペースが落ちる。六合目付近に一か所狭い稜線があるだけで、ひたすら腕力を使った強引な登りである。七合目を過ぎ、狭いルンゼペンキ伝いに上り、再び登山道に戻るとほとんど垂直の壁があり、疲れた腕ではつらい。しかし、西井のバテがやや回復してきて、雲行きが怪しくなったこともあり、スピードを上げ、最後に延々と一枚岩を鎖に頼ってトラバース気味に上がり、予定より遅れてようやく千本檜に着く。夕食前に西井が見事なスイカ割りを披露した。

7/17 4:30 起床 5:30 発→6:33 大日岳→8:20 千本檜 9:00→10:05 四合目→
11:07 麗前小屋→12:33 八海山入口

少し寝坊して、日が高くなってから慌てて出発。朝のうちからかかっていたガスも晴れ、気持よく晴れ渡った空の青が、山々の濃い緑にひときわはえる。八ツ峰は岩稜歩きというより、鎖登りである。ひたすら腕に頼って上り下りする。大日岳からは平凡な尾根道

となる。越後の山々が大きく眼前に横たわり、八ツ峰に群がっている人々が豆粒のようだ。入道岳につき、後からやって来た登山者と一緒に食べるスイカに舌鼓を打つ。ここからオカメノヅキはよく見渡せるが、かすんでいて細かいところはわからない。五竜まで行ってもやはりオカメノヅキはかすんで見えるだろうと思えたので、入道岳で引き返すことにする。千本檜に戻ってテントを畳み、走るように下山。途中西井が鼻血を出したが、大過なく大崎に着く。（晴れのち快晴）（文責：淵沢）

9. プレ夏合宿 丹波川本流 7/30

メンバー：古瀬、淵沢、大谷、中居、西井

奥多摩駅からタクシーで三条新橋の対岸を駐車場まで行き、そこで生活用具一式を置き出発する。ゴーロでは5,6台の車があり、その周辺で人々がキャンプをしていた。その間をカラビナをジャラジャラいわせながらさかのぼる。崖の多い沢で水につからずに行けないうえに雨も降り、とても寒い。手取淵で泳ぐ。50メートルくらいしか泳げないという中居は不安そうである。タンクの水を抜いたのをザイルに結び付け先に泳ぎ切った淵沢が引っ張り上げることにする。銚子の滝をのぼるのを断念し、一の瀬川にかかる橋の付近を上る事にする。1~2時間をかけてやっとのぼることができた。

（文責：西井）

10. プレ夏合宿 水根沢 7/31 晴

メンバー：古瀬、大谷、中居、西井

昨夜は三条大橋（丹波川本流）で泊って、歩き and ヒッチで水根（奥多摩駅からバスで25分）まで行く。沢自体はちょろく、暑さも手伝って、水遊びを交えながらの楽しい沢のぼりだった。数か所巻いたが、それも問題なし。ワサビ田でワサビを抜く。まだ、小さく辛さも弱い。（ゴメンナサイ）ワサビ田からすぐ水根沢林道に抜ける。

（文責：大谷）

11. 夏合宿 8/5-14

メンバー：古瀬、淵沢、大谷、西井

8/5 (晴) 7:50 上高地→8:40 明神→9:40 徳沢園→11:10 横尾→12:31 一の又小屋→13:35 槍沢ロッジ→14:55 水俣分岐→19:00 殺生

前日までに急行「アルプス 85 号」で松本まで出ておく。上高地につきザックをあけると水用タンクが入っていなかった。(アホツ!!) これほどの大荷物を背負って歩くのは私にとって初めてのことであり、早く進むことができない。荷物泣きがごとく歩く他の 3 人と、軽い荷物を背負って歩くオバサン達がとてもうらやましい。槍沢ロッジで帰途に就く一橋大学山友会の先発隊に会う。本隊は今日殺生で泊るとのこと。僕の遅足がたり、殺生には 19:00 頃どうにか着くことができた。

8/6(晴) 7:30 出発→8:05 槍ヶ岳肩の分岐→槍の穂往復 9:30→14:15 双六小屋→17:05 三俣蓮華小屋

前日の遅着につき、みなで遅寝する。テントを出ると、2,3 他のテントがあるだけだった。槍の穂往復がとても混雑していたため、無駄な時間を過ごしてしまう。双六小屋で大谷の小学校の恩師と出会う。

8/7(晴)9:35 出発→11:30 一ノ谷

東沢を少しさかのぼり、テントをはる。皆は寝るが古瀬は釣りに行く。ポーズだったようだ。

8/8(晴)5:35 出発→12:00 東沢

ひたすら河原をさかのぼる。私はテントをはるとすぐ寝る。古瀬は今日も釣りに行く。

なぜか分からないが、イワナが釣れてしまう。ヤッター! と思っていたら一匹しか釣れなかったのが逃がしたとのこと。この後私は合宿最終日までこのことについて「おいしいことをした」というようになる。

8/9(晴) 5:05 出発→7:20 東沢乗越 7:50→8:30 水晶小屋→9:20 岩苔乗越→11:25 高天原山荘→11:55 温泉 13:05→14:55 湯の沢→20mの滝

やっと谷から出ることができる。東沢乗越で差し入れのパインカンをあける。久しぶりにラジオ天気予報をきくと、沖縄あたりに台風が来ているらしい。高天原の温泉に入った後、廃道となった高天原→奥黒部ヒュッテ間の道を黒部川に出るために行くが、他の沢に出てしまう。そのまま下ってしまおうとしたが、滝がありザイルが下に届かないために断念。沢にテントを張る。

8/10(晴) 5:27 出発→6:05 廃道→7:40 高天原山荘→7:50 薬師沢岩苔乗越分岐
→9:00 高天原峠→10:52B 沢出合→11:30 薬師沢小屋→14:52 兎平

予定通り廃道に出ることができるか、とても心配だったが、アッと言う間に出ることができ意外に思う。高天原の手前で一度道に迷う。なぜ、あそこで迷ったのかいまだに不思議である。兎平でたき火をする。

8/11(晴) 5:06 出発→6:39 五郎沢出合→8:52 黒部五郎小屋→10:55 黒部五郎岳
11:20→12:20 黒部五郎小屋 12:40→14:50 三俣山荘

赤城沢出合でなぜか淵沢ひとり、冷たい水につかり、黒部川を上る。他の3人は冷たそうなので出合は巻く。黒部五郎岳は足を痛めた淵沢以外の3人で空身でのぼる。体の軽くなった私がいい気になって走っていくが途中でばててしまい「そろそろ休みませんか？」を連発するが認められず、ひいひい言いながらついていく。本来は黒部五郎泊りなのだが、明日の計画がめんどくさそうなので三俣山荘まで行く。

8/12(晴) 5:25 出発→6:10 三俣蓮華岳→7:40 双六小屋→9:00 鏡平・笠ヶ岳分岐
→12:00 笠新道・笠ヶ岳分岐→13:00 笠ヶ岳山荘

台風が近いせいか風が強い、と私は思う。三俣蓮華岳では他のオバサングループのシャッターの嵐に出合い、早々とひきあげる。今日中に笠ヶ岳に行くつもりであったが、ガスが出て来たので取りやめる。笠ヶ岳山荘で1リットル100円の水を4リットル買う。

8/13(晴) 4:22 出発→5:30 笠ヶ岳 6:11→6:51 笠新道分岐→7:26 杓子平→
9:34 鏡平・新穂高分岐

笠に登り、ご来光を仰ぐ。大谷は感動し、動くことができない。私も少し感動した。

下山はさすがに速く、予定の時間より早く着くが、鏡平・笠ヶ岳分岐手前で淵沢がこけて顔を打つ。アスファルトにでたところで、今度は私がこける。気が緩んでしまったのだろうか、前行程を通して晴れていたことに感謝。（文責：西井） 1 2 .

1 2 . 秋山山行 北海道大雪山 9/5-9/10

メンバー：淵沢、吉武

9/5 旭岳ロープウェイ発 11 : 00→13 : 10 姿見駅 13 : 30→16 : 40 旭岳 16 : 55→
17 : 20 旭岳裏の幕営地

少し薄曇りだが、気温は高い。平凡なだらだらした登山道に行く。旭岳の赤茶けた山肌が見えてくる頃から、ブランクの長かった吉武がバテ出す。姿見駅と池の分岐で監視員の人からトマトをごちそうになる。深いコバルトブルーに沈んだ池に名残を残しつつ、先を急ぐ。旭岳の上りで亀になった吉武の代わりに淵沢が天気図を取り、かなりジカンオーバーで山頂に着く（結局、吉武が天気図をとれたのは八日と九日だけである）。360度の視界が広がり、傾きかけた太陽の赤い日差しが、周囲の山々の赤土の色を際立たせている。旭岳の下りは夏の間雪渓が利用されるため、それが消えてしまったあとは急で滑りやすく、仕方なく雪解け水の流れた後のような溝伝いに下った。夜は広い空を縦断する天の川を飽きず眺めた。

9/6 出発 4 : 55→5 : 30 間宮岳→6 : 30 北海岳 6 : 35→7 : 22 石室 8 : 20（黒岳往復）
→9 : 25 北海岳 9 : 32→10 : 45 白雲岳下分岐 12 : 30（白雲岳往復）→13 : 50 高根が原→16 : 15 忠別沼→17 : 20 忠別岳 17 : 25→18 : 15 テン場

快晴。稜線から上る朝日がまぶしい。お鉢回りは南風が強く、体がふられる。忠別小屋まで進みたかったので、北回りではなく南まわりにし、北海にデポして空身で黒岳往復とする。黒岳までは広々とした高原のような景色で、心がなごむ。高山植物が咲き終わってしまっているのが残念である。北海から白雲までは平野のような広々とした稜線に行くが、石の転がった道に吉武がバテ気味となる。白雲からは旭岳やお鉢回りの山が見渡せ、気持が良い。白雲岳分岐にデポしておいたザックの雨ぶたに入っていた淵沢のレーションが荒らされていたので、一瞬まさかと思ったが、すぐにカラスの仕業と判明。

白雲小屋までは短い急な下りで、一挙に吉武のペースが落ちる。白雲止まりにしようかと考えたが、吉武の気力も十分だったので、進むことにする。高根が原は池塘を見下ろしながらの気持ちよい稜線歩きだが、人が少なくなり、熊の危険地帯に入るので、笛を吹きながら行く。途中少しヤブっぽいところがあるが、道はしっかりしている。忠別沼でもまたも淵沢が天気図をとり、忠別岳に着くころには吉武は青い顔で気力・体力ともに限界の様子。下りが遅々として進まず、荷物を減らしても足の痛みは変わらないと見えて、ペースは上がらない。ひと雨きそうな天気、忠別小屋に着く前に暗くなりそうだったので、仕方なく途中の広い登山道にテントを張る。夜半から雨。

9/7 起床 5 : 30、7 : 15 出発→7 : 40 忠別小屋分岐→8 : 40 五色岳→10 : 13 化雲岳
10 : 27→11 : 20 ヒサゴの科尔 11 : 40→12 : 20 天沼→15 : 35 トムラウシ山 15 : 52
→16 : 23 トムラウシ南沼

朝からガスで、時々雨がぱらつく。しばらく様子を見るが、視界は 30 メートル以上あり、天気図では天気は回復傾向にあったので、出発する。五色の手前あたりから時々晴れ間も見え始め、ヒサゴの科尔につくころには日も差し始めた。天沼にはサンショウウオもいたが、水を汲んでいく。途中で高山植物と庭石のような奇岩が、自然にできたとは思えないほど巧妙に配されたところがあり、トムラウシを借景にした日本庭園のようである。ナキウサギの姿に目を細めながら、急なロックガーデンを上り、トムラウシに着く。初めて頂上で我々以外の人に出会い、写真を撮ってもらう。

9/8 起床 3 : 30—4 : 50 出発→6 : 40 ニツ沼 6 : 50→10 : 30 コスマヌプリ→
12 : 10 双子池

昨日までの吉武のバテ方を考え、早めに出ることにする。ガスっているが出発。ツリガネ山の前と後に一つづつ熊の巨大なフンの塊を発見。ところどころに足跡もあり、休憩の間もレーションを食べながら、とにかく笛を吹きまくる。途中 1 パーティーとだけすれちがったが、後は人の影 1 つ見えない静かな山行となる。広い稜線を継ぎ切るように伸びる一本道を笹をかき分けながら行くのは楽しいものである。久しぶりに、否はじめて日が高いうちにテン場につき、のんびりする。

9/9 起床 4 : 05—5 : 17 出発→8 : 15 オプタテシケ山 11 : 35→13 : 45 双子池

昨夜雷雨だったので、低気圧は通過しただろうと思い、濃いガスの中出発。富士山のような大きさに登る気力も萎えそうだが、“この山さえ越えれば・・・”と自分を励ます。十勝側には時折晴れ間も見えるのだが、ガスは薄れる気配がない。雪渓がもうないので終始登山道を行く。1つ手前のピークからは狭い稜線となるが、雨交じりの突風でつらい。ようやく山頂についても、風が強く少し戻って休憩をとる。上空は晴れているようなので、しばらく様子を見ることにし、完全防寒大勢に入る。フライをかぶって天気予報を聞くが、強風注意報が出ており、雨も降って来たので、頂上からの景色はあきらめ、先に進もうとする。しかし、そこから先はせまい稜線が続き、風が強くなってきているので危険と判断、引き返すことにする。吉武が途中テントを張れそうなところを見つけるが、そこも風が強く双子池まで戻ることにする。テン場に着いた途端に豪雨になり、ドブネズミのようなみじめな気分でテントにもぐりこむ。

9/10 起床 3 : 30 出発 5 : 25 → 8 : 00 オブタテシケ山 8 : 25 → 9 : 30 ベベツ岳 9 : 50 → 12 : 43 美瑛岳 13 : 02 → 望岳台 16 : 25

天候は良いはずなのだが、やはりガス。しかし、風は収まっているので出発する。オブタテの登りの途中で本格的にガスが晴れ始め、山頂からの展望に期待する。案の定手前のピークからは頂上の導標が見え、感激。富良野盆地が一望に見渡せ、十勝側から上がっては消える真っ白い雲の塊が生き物のように稜線をはっていく。ほとんど無風の気持ちのいい稜線散歩である。ナキウサギが気軽に姿を見せ、心も軽やかになる。ベベツ付近から人が増え始め、ゴールが近いことを感じさせる。行動時間が予定で 12 時間近くあるので美瑛富士止まりを考えていたが、「美瑛に降りれる。美瑛に降りれる。」とうわごとのように繰り返す吉武の頑張りが功を奏してか、予定通りに美瑛につき、その日のうちに下山することにする。美瑛岳の登りは単調なガレの連続でうんざりしてくるが、トムラウシのロックガーデンで自称「高所恐怖症」の吉武が這うように進んでいたのを思い出し、気を引き締める。山頂からは噴煙を上げる十勝岳と、その前に広がる大崩壊の迫力ある光景に満足し、いよいよ急な西尾根のくだりである。吉武がおっかなびっくりくだるので時間通りに行くか心配したが、下山パワーでなんとか日が暮れる前に望岳台に着く。親切なおジサンに温泉まで送ってもらい、汗を流した。入浴後のジュースが滅法うまい。（文責：淵沢）

13. 個人山行 会越（未丈ヶ岳大鳥沢支流滝ノ沢、セイノ沢下降、コウノキ沢、袖沢支流御神楽沢） 9/13~17

メンバー：古瀬、古田 鮎沢OB（御神楽沢のみ）

9/12→水上

9/13→浦佐→10：15 奥只見ダム→12：30 大鳥沢出合→滝ノ沢出合

前日からの秋雨前線で雨の中の入山。新大鳥橋からダムの左岸を行く道はところどころ完全な廃道だが、出合付近の道はしっかりしている。得体のしれないキノコがゴロゴロ転がっている。薪が多い出合まで釣り登って（スカ）泊まる。その後日暮れまでトライするもスカ。晩飯はミズナの味噌汁とゆかりご飯、ミズナの根のとろろ。こう書くといかにもシッソだが実際は結構豊かに感じられるものである。古瀬はなぜかペースがつかめず、ぼけてばかり。

9/14 7：25 出発◎→滝ノ沢→12：50 未丈ヶ岳 13：10●→セイノ沢下降→16：35 コウノキ沢出合

寝坊してしまい、そそくさと朝の用意をしていると、釣り人が現れたので驚いた。人に会うことはあるまいと思っていたのに。未丈ヶ岳は秘境ではなかった。昨日釣れなかったのもそのせいなのだ。滝ノ沢は10mほどの滝を幾つか持つ、小さく地味な沢。1ヶ所、右の流水溝から登る滝では、途中ハーケンが抜けて落ちたりもしたが、シュリングを握って溝の左の丸い岩に飛びつくという荒業をこなし、おもしろい。未丈の山頂ではまた人間に会う。帯畜山岳部のOBで、仕事で野鳥観察をしており、我々のことをしきりに羨ましがる。彼らによるとシルバーラインからの登山道は整備されたらしい。

セイノ沢の下降では2階懸垂を強いられる。2度目は良い支点がなく、ブッシュにシュリングを残置してしまう。古瀬は足の親指の爪を剥がし、散々だ。コウノキ沢出合～2分ほど下ったところに、今山行の秘密兵器、工事現場用ビニルシート（6畳、ボロボロ）を張る。この日は竿を投げるヒマもなく、たき火の火もなかなか着かず、しんどい。古田も体のある部分に障害ができたと言う。夜、つかの間晴れて、谷間が半月に照らされる。その後はまた雨。

9/15 5:20 出発→コウノキ沢→11:05 丸山 11:15→12:15 奥只見ダム→御神楽沢
◎

今日は合流予定日で急がないといかんのだが、調子が良いのでどんどん攻めていく。途中から 20m 程の滝が息もつかせぬほど連続し、すべて直登。微妙なところもあり三つ道具を駆使する。この連漠帯が終わると傾斜の緩やかな源流になる。9 時頃広々とした草原に着き、「何だ、もう終わりぢやん♪」と高をくくったのがまずかった。流水に沿って進んでも、ヤブが濃くなり、あるはずのスキー場は気配もない。とうとう稜線に出てしまい、木登りして見回すと、レストハウスが 1 km 程先に見える。ある部分でほっとし、またある部分で自分に腹を立てもする。沢伝いに行くが時々面倒になってヤブを漕ぎ、池塘を横切り、また沢に戻る。とにかくなだらかなので簡単だが、そのうち方向感覚が怪しくなっていく。これだと思った沢を詰めてみると、今度は電柱が 1 本立っているだけのピークだった。がっかりしている暇もないので電柱によじ登ると、再び 1 km 先にスキー場だ。ここにて古瀬の方向感覚は完全に麻痺する。が、残された唯一の頭脳（古田）が働き、電柱を立てるために付けられたであろう道を探し当て、それをたどる。そして、この沢が違ったら合流がやばいなあという時間に、冷たさわがようやくスキー場にぶち当たる。雨の中、ぐったりして着いたダムでは、預かってもらっていた米をうけとり、足りなくなっていた味噌をいただき、さらに温かいけんちん汁まで頂く。観光客には好奇の視線をあびたが、土地の人は親切だった。そして土砂降りのなか、さっそうと鮎沢 OB 登場。ずぶ濡れどろんこで汁をすすっている我々とは好対照だ。林道歩きの途中で車に 30 分乗せてもらい、明るいうちにテン場に着けた。展開の目まぐるしい 1 日だった。

9/16 6:30 出発→御神楽沢→15:30 ムジナクボ沢出合◎

釣りながら行く。なかなか優雅だ。不肖私目も最後の方やけになりかけた頃、ようやく 25 cm のがかかり、感激、感激。やはりエサがポイントか、1 袋 ¥150 のウジむしではだめなのだ。時折晴れ間ものぞく天気で嬉しい。沢も前の 2 本と違い大きく豪快だ。この日は 7 尾、塩焼き、刺身、岩魚汁。脂の乗った岩魚汁が最高。しかしこの夜は風雨とも強く、ボロシート 1 枚ではなかなかシビアだった。

9/17 5:50 出発◎→8:10 会津駒ヶ岳 8:35●→9:55 檜枝岐◎→会津高原

魚度も過ぎ、特に悪場もないのでさっさと上まで上がってしまう。藪こぎは10分弱。ピークは風とガスの中で寒く、小屋の主人はわけが分からず、さっさと下ってしまう。檜枝岐のそばとはっとうは、相変わらず良い。

今回は久々にリーダーとしてでない山だったためか、特にはじめのうち緊張感に欠け、ひよっこ気分を味わってしまった。が、得るものも多かった。なにより、沢に4連泊するという事はそれ自体で充実するものだ。（文責：古瀬）

14. OB山行 徳沢周辺 9/23-25

メンバー：古瀬、吉武、大谷

9/23 松本＝上高地→徳沢(晴)

松本に11時集合。古瀬遅刻。上高地から徳沢まで、歓談しながらの歩行。徳沢でC.カレーライス・スープ・福神漬と長豪華なメニュー。食後は酒をのみながら自己紹介。たのしい哉。

9/24 (大谷) 徳沢→奥又白池→五・六のコル→前穂→岳沢ヒュッテ→徳沢 (晴)

倉知、金子、前神諸氏に連れられて、北尾根から前穂に登る。ただついて行くだけだったが、初の岩登りということで楽しめた。最初はかなり岩をおとしてしまったが、注意をもらい改善できたと思う。行動時間は14時間。これにはマイッタ。また、紅葉はすでに始まっていた。奥又白池の景観は特に絶品。

ところでこの日は私たちの14時間のほかに2つの事件があった。一つは古瀬の火傷。食事準備中に湯を左足に掛けた。このため、25-26に予定していた冬山偵察は延期。もう一つは松下OB遭難騒ぎである。これは無事収拾したようだ。

(古瀬) 徳沢→横尾→涸沢→五・六のコル→奥又白池→徳沢

単独、日帰りということで、飛ばしに飛ばし、涸沢まで2時間40分で着く。コルからの下りでは道を失い、落石などしてヒヤヒヤしたが、踏み跡通り行けば問題ない。ちなみに涸沢のおでんはウマイ。

(吉武) パノラマコース紅葉の山ははじめてであった。何とも荒々しい監事が心地よい。涸沢に行く途中の道は悪かった。

15、個人山行 北穂－奥穂 9/25-26

メンバー：大谷

9/25 徳沢－涸沢 (晴)

昨日の14時間行動の疲れの上に、荷物がやたら重いので奥穂に行く予定を変更して、涸沢でテントをはる。12:30には着いて寝るまでまったりと過ごすことができた。

9/26 涸沢→北穂→奥穂→涸沢→上高地 (快晴)

絶好の山日和。5:30にテントを発つ。霜柱を踏みしめのぼる。北穂、奥穂ともに天気には完全に恵まれ、槍、笠、赤牛、富士山 e t c がはっきり見えた。奥穂からは昨日登った北尾根の様子が分かった。

緑－黄－赤の織りなす色の対照で山は染まっている。深まる秋に追われるように上高地に下った。(文責：大谷)